



考古博物館に展示してあるコククジラの骨(復元)

水田の開発は、はじめから広々とした平地から行われたのではなく、谷津のような狭いところから始まりました。そして、徐々に広い地域へと進められていったのです。日本神話の中では、その状況を「狭田(さだ)幅の狭い田んぼ」、「長田(ながた・おさだ)細長い田んぼ」、そして「平田」という言葉を使って示しています。この開発状況は、考古学の面からも立証されています。

「平田」の地名は全国各地にあります。本市の「平田」は、現在の国道14号線に沿った地域で、かつては農家が並び、北側に畑、南側に水田が耕作されていました。ここでは、確かに広々とした地域に水田が作られていて、平田といういわゆる「平らな田」にふさわしいのですが、実は、この「ヒラ」には傾斜地、崖といっ

## 砂州傾斜地に広がる田

### 平 田

た意味があり、「平」の漢字は、読み方を借用した当て字だともいわれています。なるほど、国道上から南の総武線を望むと、どこの地点からでもある程度の傾斜が見られます。これは、国道が市川砂州(さす)の一番高いところを通り、総武線は砂州の作られた当時の海岸線に当たるところを通っているからです。

さて、今では、どの辺りか分からなくなりましたが、平田城が築かれて千葉常胤の長子胤正の曾孫にあたる胤俊が、平田左衛門尉を名乗って居城していました。千葉系図には胤俊の子に胤信(平田次郎)と資胤(平田四郎)の兄弟がいたことが載せられています。この一族がどのような運命をたどったのかは分かりません。

また、現在の平田二丁目の東部(一番〜九番)地域を、字「太子前」と呼びました。これは、聖徳太子を祀った太子堂があったからです。聖徳太子は多くの寺院を建立したところから、江戸時代に入ると、大工、屋根ふき職人などの建築関係者が「太子講」という講中をつくり、聖徳太子を工匠の祖として信仰していました。「太子前」の字名は、ここから起ったものです。

昭和三十四年六月、市川電報電話局が平田に新築落成しましたが、この建築中、地下四メートルからクジラの骨が発見されました。これは、市川砂州ができる以前、この辺りが海であったことを示しています。このクジラは六千年前のイワシクジラと判定されましたが、昭和五十七年に至ってコククジラであることが分かり、世界的にも貴重な資料として考古博物館に展示されています。

次回は「下貝塚」を予定しています。  
(社会教育指導員 綿貫喜郎)